

古都鎌倉を取り巻く
山稜部の調査概要



～はじめに～

古都鎌倉の歴史遺産は、平成4年に日本国政府が作成した「世界遺産条約文化遺産暫定一覧表（暫定リスト）」に「古都鎌倉の寺院・神社ほか」として登載されています。

鎌倉市では、平成8年度から市の総合計画に「世界遺産一覧表への登載の要請」を掲げ、地元としての準備を進めてまいりました。平成11年1月からは、神奈川県教育委員会と共同で「古都鎌倉の世界遺産登録検討連絡会議」を設置し、登録推進に向けた検討を進めています。

今回の発掘調査は、古都鎌倉の歴史遺産を特徴づける防衛性や都市開発の跡を示すとされる鎌倉の周囲を取り巻く山稜部にある中世土木遺構について、その性格や時代を確認するため国・県のご指導・ご助言をいただき、横浜市教育委員会と逗子市教育委員会のご協力を得て、県と共に（財）かながわ考古学財団に委託して実施したものです。

このたび、調査報告書が刊行されましたが、これをわかりやすく市民の皆様にご紹介するため本誌を発行いたしました。誌面の都合で各調査地区の代表的な調査箇所のみのご紹介となりましたが、山稜部のいたるところに当時の人々の都市生活と一体となった遺構が残っていることがわかりいただけると思います。また、当時の山稜部に吹き抜けた風を感じていただければ幸いです。

～目次～

1. 極楽寺坂地区……………3
2. 大仏坂地区……………5
3. 仮粧坂地区……………6
4. 亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区…7
5. 鷲峰山・天台山地区…………8
6. 杉本城・釈迦堂口地区……9
7. 名越切通地区……………11
8. 朝夷奈切通地区……………12
- 英文概要……………13

～例言～

- ◎本誌には平成12年度に実施した古都鎌倉を取り巻く山稜部の調査報告書の概要を掲載しました。
- ◎編集は、鎌倉市教育委員会世界遺産登録推進担当が行いました。また、写真等は当委員会が保管しているものを使用しました。

【表紙写真の説明】

霊山山「仏法寺跡」付近の空撮（極楽寺地区）
View from Sky of Buppouji Temple Site in Mt. Ryuzen-yama

調査結果の概要

鎌倉は古くから一方が海に面し、三方を山稜に囲まれた要害の地と言われてきました。

將軍を筆頭とした武士達は山稜部の内側の平地に都市を築きましたが、鎌倉と外界との接点は切通と呼ばれる山道だけでした。この切通は経済的・軍事的にも重要な地点であったため、周辺に切岸や平場・堀切を配する等、防衛性を考えた造りになっていると言われています。

しかし、これらの遺構は、これまでに発掘調査が実施された経過はほとんどなく、遺構の構造・構築年代などの実体は不明のままでした。そこで、この防衛的遺構を中心とした山稜部の遺構の実体を解明することが必要とされ、発掘調査が計画されたのです。

現地の調査は、平成12年6月1日から11月27日まで行われ「極楽寺坂」「大仏坂」「化粧坂」「壱ヶ谷坂・巨福呂坂」「鷲峰山・天台山」「杉本城・釈迦堂口」「名越切通」「朝夷奈切通」の8地区が設定されました。

今回の調査により、旧鎌倉を取り巻く山稜部に残されている防衛的遺構群は、おおむね中世に構築されたものであることが明らかになりました。

鎌倉幕府の草創期(12世紀末)まで遡るような遺構・遺物は確認できませんでしたが、年代が判別できるものの中では、「一升辨」と呼ばれる大規模な辨形をした遺構が13世紀に構築された可能性が明らかになったほか、14世紀から15世紀と考えられるものが多くありました。

これらの防衛遺構が構築される契機としては、元弘の乱(1333)や南北朝の動乱(1334～1398)を考えることが出来ますが、13世紀の後半に遡るものがあることから、元寇(13世紀後半)による対外的な防衛意識の高まりに契機を求めるとも可能と思われます。これらのことは、鎌倉時代末期の社会基盤の変化に伴う地域紛争の激化や、元寇後の戦法の変化等に対応しているのかもしれませんが。

今回の調査では防衛的遺構ばかりでなく、茶毘土をはじめとする葬送・祭祀関連の遺構・遺物や石切場や石塔製作址等、鎌倉石の生産に関わる遺構も多く発見されました。これらの遺構は仮板坂や衣張山の周辺で多く発見されましたが、中世の都市鎌倉を取り巻く山稜部は防衛的な遺構ばかりでなく、都市の周縁部分として多義的な性格を有していたことが分かります。特に極楽寺坂地区の調査では、地鎮に用いられたと推定される合わせ口のかかわりが2箇所で見られ、その年代が13世紀後半から14世紀と考えられるため、この頃になって山稜部に本格的な手を加え、切岸や平場を造成していると推定されるようになりました。尾根上の調査ではかわらけの細片が各地で発見されていますが、これらはこうした造成工事の際の地鎮祭に関する遺物と考えられます。

今回の調査では防衛的遺構ばかりでなく、茶毘土をはじめとする葬送・祭祀関連の遺構・遺物や石切場や石塔製作址等、鎌倉石の生産に関わる遺構も多く発見されました。これらの遺構は仮板坂や衣張山の周辺で多く発見されましたが、中世の都市鎌倉を取り巻く山稜部は防衛的な遺構ばかりでなく、都市の周縁部分として多義的な性格を有していたことが分かります。特に極楽寺坂地区の調査では、地鎮に用いられたと推定される合わせ口のかかわりが2箇所で見られ、その年代が13世紀後半から14世紀と考えられるため、この頃になって山稜部に本格的な手を加え、切岸や平場を造成していると推定されるようになりました。尾根上の調査ではかわらけの細片が各地で発見されていますが、これらはこうした造成工事の際の地鎮祭に関する遺物と考えられます。

さらに特筆すべきことは、元弘の乱の勝敗を決定付けた「稲村ヶ崎攻防戦」の舞台となった「仏法寺」の跡と考えられる遺構が確認されたことです。稲村ヶ崎の霊山山東の山腹に平場が存在し、建物跡や池の跡などが発見されています。ここからは鎌倉の湾を一望することができます。和賀江嶋や海上を監視する場所としての機能を持つと共に、極楽寺坂や稲村ヶ崎口をおさえる要衝の地であったと推定されます。

今回の調査を実施する中で、山稜部の遺構が思いのほか良好に残されていたということが分かりました。藪を少しかき分けて歩いてみると、切岸、平場、堀切などが非常に良く残っています。これらの遺構群は、漫然と歩いていると見過ごしてしまいそうな、決して派手な遺構群ではありませんが、「武士の都」に残された貴重な遺産であり、しっかりと後世に伝えていく必要があると思います。



鎌倉遠景 Distant View of Kamakura

1 極楽寺坂地区

Gokurakujizaka-Area

極楽寺坂は七切通の中では唯一史跡に指定されていないので、指定に向けた資料を得るため、他の地区より多く33箇所のトレンチを設定しました。

馬場ヶ谷の西側尾根の南先端部では、堀切を調査しました。堀切の底面には、北端に沿って幅30cm、深さ20cmの排水溝が掘られており、壁面の傾斜などから推測すると、上幅約10m、下幅約2m、中央部での深さ約6mの巨大な遺構であったと考えられます。出土遺物はなく、築造年代は不明です。

極楽寺の北東部には地元で「一升榊」と呼ばれる榊形遺構が存在します。榊形は人工的に造られた土手によって囲まれた方形の区画で、現在は山林になっていますが、基底部幅5～8m、高さ1.5～2.8mの堂々たる土塁を現在も見ることができます。土塁による囲郭の規模は、南北方向に36.5m、東西方向は南側が30m、北側が19mで、南側がやや広がる台形状となっています。榊形の南西隅が入口部と推定され、その部分だけ土塁が途切れ、その先には尾根道が延びています。この土塁に囲まれた平場を調査(第6号トレンチ)したところ、2時期にわたって土塁を構築していることが確認され、出土遺物からその構築年代が13世紀後半まで遡ることが確認されました。榊形遺構の造営は、東国では14世紀に発生するとされる方形館址と関連づけられて考えられていることから、この時代まで造営が遡ることは、考古学上の大きな発見でした。

光則寺裏山の頂上部に設定した第16号トレンチからは、口を合わせて埋められたかわらけ皿が2箇所から見つかりました。かわらけの年代は13世紀後半～14世紀と考えられます。出土場所の立地から見て光則寺あるいは長谷寺に関わる地鎮の遺物と考えられます。

成就院の背後の丘陵上には「五合榊」と呼ばれる榊形遺構の存在が古くから知られています。極楽寺切通の鎌倉側を見下ろす極めて重要な地点で、平場の東と北には土塁状の高まりがあり、この平場に第26号トレンチを十字に設定しました。北側で石塔が3点出土し、中央部からはかわらけが集中して出土しました。出土遺物から、土塁状の高まりのうち、いくつかは塚である可能性が高く、中



第2号トレンチ 堀切
Horikiri Moat in the 2nd Trench



「一升榊」土塁
Earthwork in Isshoumasu



「五合榊」遠景 Distant View of Gongoumasu



霊山山の塚
Earthen Mound in Mt. Ryouzen-yama



仏法寺跡の敷石
Paved Stone in Buppouji Temple Site



仏法寺跡の柱穴列 Line of Postholes in Buppouji Temple Site 「一升枿」 Isshoumasu



世後期の頃に墓地もしくは供養所となったものと推定されます。採集した五輪塔地輪には、「元弘三年 七月十三日」と銘があり、かわらけも13世紀中葉まで遡ることから、もともと切通を警護するために作られた五合枿が、鎌倉幕府が滅亡した元弘三年（1333）を機に、墓地もしくは供養所へと変化したとも考えられます。

五合枿の南、霊山山の山頂では、大規模な塚が発見されました。直径8～9m、高さ約2.5mで、出土遺物の年代は13世紀から16世紀までときまぎまですが、おそらく16世紀頃に、付近にあった石塔や骨蔵器などを集めて構築したものと考えられます。

霊山山から南へ伸びる尾根の中程、急峻な東斜面の高所に「霊山寺跡」あるいは「仏法寺跡」と伝わる平場があります。この調査では山裾寄りに大型の凝灰岩切石を敷く基壇状の遺構のほか、方形の堅穴状遺構、溝、1m間隔で並ぶ柱穴、掘立柱建物の柱穴・土坑などが見つかり、土坑の中には火葬骨片を多量に埋めたものが見られました。このほか、6m×9mの卵形をした池跡も発見されています。これは、極楽寺の忍性と日蓮の雨降合戦にちなむ池であると伝えられています。出土遺物にはかわらけ皿・常滑甕・捏ね鉢・瀬戸瓶子・釘・銭・近世陶磁器等があり、これら遺構群が中世に遡ると共に、極楽寺南側尾根一帯に広がる葬地の一つとして、近世までこの平場が用いられていたものと考えられます。

霊山寺は元弘三年（1333）の鎌倉攻めの主戦場となったところで、鎌倉防衛の最前線でした。この場所を確認できたことは、鎌倉時代末の鎌倉防衛がどのように考えられていたかを知る、大きな手掛かりを得たことになります。

2 大仏坂地区

Daibutuzaka-Area



「五合峠」から大仏を望む
View from Gongoumasu to Daibutsu

大仏切通から、佐助稲荷付近までの山稜部を大仏坂地区とし、鎌倉旧市街の西面を南西から北東方向へ延びる丘陵上にトレンチを計14箇所設定しました。防衛遺構は、国指定史跡北条氏常盤亭跡や同大仏切通の周辺のほか、この丘陵の西面～北面にも構築されたであろうという予測から、14箇所のトレンチのうち第2、14号トレンチ以外は、すべて丘陵の西および北向きの斜面に設定しています。これらは、丘陵頂上部と尾根筋より一段下がった平場というように比較的似たような地形を複数箇所調査し、その共通性を見出そうとしたものです。

尾根筋の北西方向、現在の仲ノ坂団地に面する斜面には数箇所断続的に平場がみとめられます。第3号トレンチはその中の一箇所に、斜面に向かって垂直に設定しました。現地地表下1～2mで平坦面が検出され、その直上より14世紀後葉のかわらけが3枚合わせ口で出土しました。かわらけは1枚が下に置かれ、2枚がそれにかぶさる形で出土し、内部は中空で、遺存物はありませんでした。平坦面の上から出土していることから、山を造成して平場を造るにあたって行われた地鎮祭等に関わる遺物と考えられます。

しかしながら、佐助稲荷社の裏山・桔梗山付近は近現代の地形的改変を大きく受けています。とくに「S字状鞍部」等は、太平洋戦争末期の陣地構築などによる近現代の造成によって造られた地形であり、中世まで遡る人為的な防衛施設と断言しうる遺構は乏しいものでした。



S字状鞍部の平場
Hira-ba Next to S-shaped Col



第3号トレンチ 合わせ口かわらけ
Biscuit Ware Small Dish with a Fitted Lid in the 3rd Trench

3 仮粧坂地区

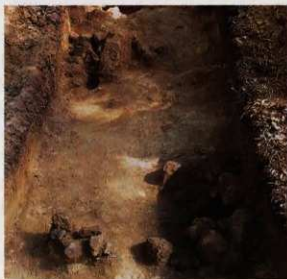
Kewaizaka-Area

浄智寺谷の最奥部から源氏山公園にかけての山稜部を仮粧坂地区とし、調査を行いました。扇ガ谷と山ノ内・梶原をへだてる尾根上の道は現在ハイキングコースとなっており、この道沿いの山稜の西側および北側に重点を置き計9箇所のトレンチを設定しました。

扇ガ谷の最奥部、海蔵寺の裏手から瓜ヶ谷方面へ抜ける鞍部には、丘陵を分断する「大堀切」と呼ばれる大規模な切通状の遺構と土手状の道（土橋状遺構）が存在します。土橋状遺構は道であり掘ることが出来ないため、この大堀切の瓜ヶ谷側で調査を行いました（第4号トレンチ）。遺物は出土しませんが、人工的に造成された遺構であり、谷底に平坦面が存在することが確認されました。

本地区では9箇所のトレンチ中3箇所（第3、5、6号トレンチ）で茶毘址が発見されており、仮粧坂という境界域を特徴づけるものとなっています。出土遺物から、第3号トレンチの茶毘址は14世紀後半～15世紀前半に比定でき、第6号トレンチでは14世紀後半のかわらけ皿の他に、火葬骨片と釘が出土しました。このことから、茶毘址が存在する平場は14世紀前半代には存在しており、その後茶毘所に变化したと推定されています。付近には市指定史跡瓜ヶ谷やぐら群をはじめいくつかのやぐら群が存在していることから、それらのやぐらとの関連も考えられます。

浄智寺の谷の最奥部平場に設定した第9号トレンチでは2時期の生活面を確認し、上位面は山裾の岩盤を削り平場面積を拡張していることがわかりました。平場の性格は不明ですが、おそらく浄智寺に関連した塔頭跡と考えられます。出土遺物には、14世紀後半～15世紀のかわらけ皿・国産陶器・舶載陶磁器・瓦・金属製品等があります。この時期には尾根の頂上部付近まで寺院の造営が行われていることが分かり、鎌倉の周囲をめぐる山の状況を示す重要な発見となりました。



第6号トレンチ 茶毘址
Site of Crematory in the 6th Trench



大堀切の調査
Investigation of Large Horikiri Moat



浄智寺奥の造成跡
Site of Development at the Back of Jouchiji Temple

4 亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区

Kamegayatuzaka・Kobukurozaka-Area

山ノ内路の南側、浄智寺境内から鶴岡八幡宮境内の間に連なる山稜を亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区としました。山稜は亀ヶ谷坂によって分断されており、この西側の亀ヶ谷坂地区で13箇所、東側の巨福呂坂地区で8箇所、計21箇所の調査を行いました。

亀ヶ谷坂地区の第2号トレンチでは、3時期の生活面を確認しました。最下面は谷中央部で発見された遺構群で、一辺約1.8mの井戸と思われる方形土坑の他に、排水溝と石切り状の加工面をもつ岩盤がありました。中位面の谷中央部には炭層が広がり、礎石の可能性のある伊豆石が見つかりました。この炭層からは舶載陶磁器を含む多量の遺物が出土しました。上位面は地表下70cmにあり、礎石が2箇所で見出され、青磁白磁の碗皿類・手焙りなど日常用品の他に、天目碗・香炉・仏華瓶などが出土しました。遺物の様相からこの平場は寺院址と推定され、宝鏡寺の跡と考えられます。なお、年代は15世紀中葉から後半に比定され、火災を受けていることが判りました。

禪居院の裏手、山ノ内路を見下ろす山稜の尾根筋に沿って、延長約100mにおよぶ堀割状の溝が存在します。この溝に直交して第15,16,17号トレンチを設定したところ、断面形が方形～逆台形を呈する上幅1.5m、基底部幅1m、深さ2mの堀割を検出しました。寺院の境界と山ノ内から扇ヶ谷への通行を分断するための施設と考えられますが、底面が平坦になっており、深さが2mもあるため、ここを通れば人目に付かずに移動が可能な通路として用いられた可能性もあります。構築時期は堀割横平場から常滑甕片が出土し、堀割覆土中層に宝永火山灰が含まれていることから、中世に遡るものと考えられます。

円応寺の東側、巨福呂坂隧道の脇には二段になった切岸が存在します。ここにトレンチを設定したところ、15世紀段階には、現在尾根道になっている下に、岩盤を削平した平場が存在したことがわかりました。この場所は巨福呂坂の山ノ内側であることから、旧巨福呂坂の遺構かと推定されています。



禪居院奥の堀割
Canal at the Back of Zenkyoin Temple



禪居院奥の堀割
Canal at the Back of Zenkyoin Temple



宝鏡寺跡
Site of Houkyouji Temple



旧巨福呂坂上の調査区
Investigation Area above Old Kobukuro-zaka



宝鏡寺跡の火災址
Site of Fire in Site of
Houkyouji Temple

5 鷲峰山・天台山区

Juhusen・Tendaizan-Area

鎌倉旧市街地の北方～北東方に広がる山稜の一带を鷲峰山・天台山区として調査を行いました。ここでは他地区で顕著に見られた尾根や鞍部を分断する堀切などはほとんど存在せず、岩盤が露出する切岸状の遺構も瑞泉寺の旧境内以外あまり見られません。しかし、天台山周辺は近代まで石切が行われていた様子が認められ、やぐら群も存在します。鷲峰山周辺はすでに史跡指定されているため、トレンチは、天台山を中心にやぐらや近代の石切場を避け、天園ハイキングコースに沿って6箇所設定しました。

天台山山頂部の平場に設定した第4号トレンチでは、明確な遺構は認められませんが、かわらけが数点まとまって出土しました。復元された3点は、いずれもロクロ成形の小型のもので、13世紀後半のものと考えられます。山頂での祭祀もしくは付近に存在するやぐら等の葬送行為に伴う遺物と推測されます。

天台山山頂から約65m東方には「貝吹地蔵」と呼ばれる石像があり、ちょうどその真上に小規模な堀切状の落ち込みがあります。これに直交して第5号トレンチを設定しました。岩盤上でも堀切状の落ち込みは確認でき、トレンチ北西側の岩盤は平坦で人為的な造成就が行われていました。

貝吹地蔵の上方から南東～南側に伸びる尾根には、階段状の地形が見られます。この段々に第6号トレンチとして3箇所設定しました。2段目のトレンチでは溝や30cmほどの深さで方形を基調に削られている石切痕が検出され、層塔の未製品と思われる凝灰岩塊が出土しました。トレンチ外にも切り出された凝灰岩塊が散乱していることを考え合わせると、この石切痕は石塔を切り出した痕跡と考えることができ、この周辺は石塔製作址と推定されます。鎌倉では、中世まで遡る石塔製作址は今回が初めての発見です。都市周縁に存在する種々の産業のうち、鎌倉石の切出しや加工は鎌倉独自の産業であり、鎌倉文化の特徴を表す遺構として注目されます。



貝吹地蔵脇の切通道
Kiridoshi Street beside Kaibuki-jizou Statue



層塔の未製品
Incomplete Object of Multi-storied
Stone Stupa



貝吹地蔵上の平場
Hira-ba above Kaibuki-jizou Statue



第6号トレンチ 石切痕
Quarry in the 6th Trench

6 杉本城・釈迦堂口地区

Sugimotojo・Shakadouguti-Area

鎌倉地区の中央を流れる滑川中流域の交通の要衝にあたる杉本寺は、南北朝の動乱に際し杉本城が構えられた所で、その南には名越・材木座方面へ抜ける釈迦堂口があります。このため杉本寺周辺に6箇所、釈迦堂口周辺に6箇所の調査を行いました。

杉本寺の北東、尾根の頂部に扶まれた鞍部平場に第2号トレンチを設定し、3時期の生活面を確認しました。第二面では、火災を受けた人頭大の河原石を据えた建物礎石や、岩盤面を削平して溝と柱穴を掘っている様子が見つかりました。第三面では、柱穴や矩形に掘られた堅穴状の土坑、甕を据えたようなすり鉢形の土坑が見つっています。出土遺物には、13世紀後半～15世紀後半までのかわらけ皿・国産陶器・舶載陶磁器・瓦・石製品・金属製品などがあり、第二面は14世紀後半に比定できます。この地点は浄妙寺境内絵図に見える塔頭「五眸庵」跡と推定され、仮粧坂地区第9号トレンチ同様、禪宗寺院が尾根の頂部まで開発を行っている様子がわかりました。

第3,4号トレンチは稲葉越の最奥部尾根筋にある堀切に設定しました。両者とも東西方向の尾根を分断すると同時に、二階堂と浄明寺の切通状の交通路としても機能していたものと考えられ、杉本城が二階堂大路・六浦道・稲葉越の三つの道に囲まれた交通の要衝に構えられたことがわかりました。

第9号トレンチは、釈迦堂口の性格を確認するために設定しました。釈迦堂口東側の北へ延びる尾根の付け根に位置する堀切の調査です。付近は両側が切岸になった帯状の尾根で、まさに城壁に築かれた門のような場所です。調査の結果、堀の幅2m、深さは3mに達しました。出土遺物がなく遺構の年代は明らかではありませんが、堀切底部から側面にかけては柱を据え付けたような方形基調の掘り込みが確認され、その横には直径30cm、奥行き19cmの穴が穿たれており、門を持つ木戸の存在が推定されました。これは堀切で丘陵を分断すると同時に谷から谷への通行を防ぐための施設と考えられます。門の位置から、木戸によって西（釈迦堂口）から東（犬懸ヶ谷）への通行を止める意図が強くうかがえます。今回の調査全体で18箇所の堀切を調査しましたが、このような明瞭な施設の痕跡が発見されたのは、ここだけでした。

第10号トレンチは、第9号トレンチから140mほど北の「釈迦堂東やぐら群」の最奥部にあたる平場にT字形に設定しました。この平場を囲む三方の崖に上下3段以上のやぐらが開口しています。トレンチ中央部やや西寄りには岩盤を長方形に掘り込み、その上部に切石を並べた遺構が発見されました。黒色土の中に多量の火葬骨が含まれており、茶毘址と推定されます。平場の西寄りの茶毘址と対応する位置には、鎌倉石が敷き並べられていました。平場の中央部には、径30～40cm、深さ20～30cmほどのピットが数箇所発見されました。規則的な並びは認められないため、茶毘もしくはそれに類する遺構と推定されます。やぐらの前面からは石造塔が密集して出土しました。形態的に多くは室町期のもですが、一部鎌倉期と推定されるものもありました。崩落などで元から平場にあったものと、上部のやぐらから転落したものが混ざり合ったものと考えられます。この他14世紀後半代を主体としたかわらけ、常滑壺破片などが出土しました。石塔とこれら遺物の年代観をあわせると、このやぐら群の造営は鎌倉期に始まり、14～15世紀を通して営まれたと考えられます。その後、石砌等で破壊されることなく、現在見られるような大規模なやぐら群の景観を残すに至ったのでしょう。

衣張山山頂の平場に設定した第14,15号トレンチでは、中世の茶毘址が検出されました。鎌倉旧市街を囲む丘陵の最高地点で茶毘が行われていたことは、中世都市鎌倉の周縁部が持つ宗教性をよく表していると想像できます。



第10号トレンチ やぐら・茶毘址
Site of Yagura Crematory in the 10th Trench



衣張山山頂の茶毘址
Site of Crematory on the Top of Mt. Kinubari-yama



第10号トレンチ やぐら
Yagura in the 10th Trench



五跡庵跡の平場
Hira-ba in Site of Gobouan Temple



釈迦堂口の堀切(門跡)
Horikiri Moat in Shakadcu-guchi (Site of Gate)



稲葉越の堀切
Horikiri Moat in Inabagoe Street

7 名越切通地区

Nagoekiridoshi-Area

名越切通の鎌倉市側、大切岸の内側を中心に9箇所のトレンチを調査しました。このうち一箇所、第6号トレンチのみ逗子市域での調査です。

第1号トレンチは比較的大きな平場に設定し、削平岩盤面に土坑群と小ピットを発見しました。また、第2号トレンチでは尾根上に連続する小規模な平場に茶毘址と土坑を発見し、茶毘址のある平場が明瞭な削平面であることがわかりました。出土遺物には、かわらけ皿・常滑・青磁・火葬骨・五輪塔などがあります。

第6号トレンチは国指定史跡「名越切通」の現在通行止めになっている逗子市側の切通に設定しました。ここでは、およそ4時期の道路面が確認されました。道路面は切通の崖面から崩落した泥岩塊が踏み固められたものです。最も上の道路面は、現在の道路面の15～20cm程下にあり、両側に排水溝を伴っていたようです。この時の道路幅は約3.4mで、排水溝は3時期目以降に掘られたようで、それ以前にはありません。最も下の道路面は岩盤を直接掘りくぼめたものでした。この時の道路幅は約2m、道路中央での切通の高さは8.2m前後と推定できます。岩盤直上に堆積する土層から、中世～近世の遺物が出土し、最下道路面が近世に使われていたことがわかりました。



切通道の調査
Investigation of Kiridoshi Street



切通の道路跡
Site of Street in Kiridoshi



第2号トレンチ 茶毘址
Site of Crematory in the 2nd Trench



第1号トレンチ 土坑
Earthen Pit in the 1st Trench

8 朝夷奈切通地区

Asainakiridoshi-Area

朝夷奈切通は鎌倉と六浦をつなぐために開削された道です。トレンチは鎌倉市側で2箇所、横浜市側で10箇所設定しました。

第10号トレンチは朝夷奈切通のなかで「大切通」と呼ばれる北側崖面の真上にある平場に設定しました。現地表から20cm下で泥岩塊を敷きつめた面に達し、さらに下でローム層に達します。敷かれた範囲はトレンチの切通側の半分ほどで、切通掘削に伴って発生した泥岩塊を敷き詰め、切通頂上に平場を造成したものと推定されます。出土遺物はなく、造成の時期は不明です。

第11号トレンチでは削平岩盤面と浅い溝が見つかりました。溝は後世に掘られたものと考えられますが、かわらけ皿の微細な破片が出土したことから、平場の造成時期は中世に遡る可能性があります。第12号トレンチでは、かわらけ片が少量出土しましたが、明瞭な遺構は見られませんでした。

第1～9号トレンチでは、高速道路建設時や植林による大規模な地形改良等が行われ、明瞭な遺構は確認されませんでした。鎌倉周辺の植林棚は、近世における六浦の塩田開発により、その燃料供給のために急激に開かれたとの説があります。朝夷奈切通を挟んだ横浜市金沢区朝比奈町は、昭和初期までは鎌倉町峠村で、区内にある鼻欠地蔵までが鎌倉の内でした。

この地域に平場や堀等の防衛的といわれる遺構が少ないのは朝夷奈切通が鎌倉の内にある切通であり、都市開発の状況が他の地域と異なっていたことと共に、経済的な側面が軍事的なそれよりも大きかったためなのかもしれません。



大切通
Large Kiridoshi



第10号トレンチ 大切通上の平場
The 10th Trench in Hira-ba above Large Kiridoshi



第11号トレンチ 平場
The 11th Trench in Hira-ba

The Medieval Capital of Kamakura

Kamakura is surrounded on three sides by mountains and the fourth by the sea, and since ancient times it has been known as a strategic stronghold. After Minamoto Yoritomo established the Shogunate here at the end of the 12th century, Kamakura prospered as a "Samurai's Capital" for about 200 years.

To protect the town, the Shogunate set up various defense installations in the mountains. Even today, more than 600 years since the military administration, traces of these defense facilities can still be seen at "Kiridoshi," "Kirigishi," and "Masugata" in Kamakura.

Moreover, though it is covered by grass and can't be confirmed at present, a plateau, "Hira-ba," and a sheer cliff, and "Horikiri Moat," which are assumed to have been created artificially, can be seen in the ridge and mountainside.

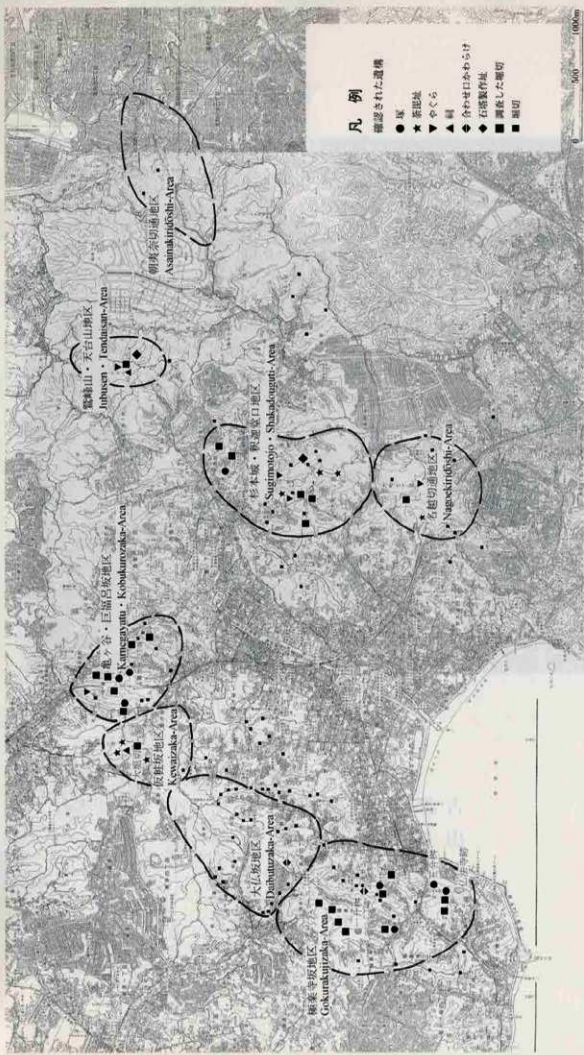
An investigation to determine whether the defense structures existed naturally or were artificially constructed, and if so, when, was conducted. The district around the passes named "Kamakura Nana-Kuchi" (seven entrances) was divided into eight areas: "Gokurakuji-zaka," "Daibutsu-zaka," "Kewai-zaka," "Kamegayatsu-zaka and Kobukuro-zaka," "Jubusen and Tendai-san," "Sugimoto Castle and Shakadou-guchi," "Nagoe-kiridoshi," and "Asaina-kiridoshi." For the investigation, 123 trenches with a width of 1.5m were set up to total a length of 1500m and an area of 2257.6m².

The investigation indicated that in some areas no man-made construction or relics were detected at all but in other areas such artificial structures as "Horikiri" and "Masugata," and medieval relics were excavated from many trenches. Almost all of the relics were produced after the 13th century, while those dating before the 12th century were few. Therefore, the structures concerned with defense were not built during the Shogunate but rather were constructed during the Hojo Regency.

There are many relics from the 14th century, and it is considered possible that they were produced for urgent use in battles during the Genkou Era when the Kamakura Shogunate was overthrown in 1333 and in the war of the North and South Imperial Courts.

Further, randomly located tombs can be seen, and there are many mound-shaped funeral structures in the area. Signs of medieval cremations were discovered in such districts as "Kewai-zaka" and "Shakadou." In "Jubusen and Tendai-san" remains of what are believed to have been tombs were discovered. The results of the investigation showed that in the late medieval era, the use of this area was not confined to defense but was used for various purposes.

Besides this, earthen vessels from the late Yayoi Period were excavated from a mountain in "Gokurakuji-zaka," as well as the "Sugimoto Castle and Shakadou-guchi" district, while those from the Jomon Period were excavated from the "Daibutsu-zaka" and "Kewai-zaka" districts. Such discoveries make clear that in ancient times these hilly areas were used as sites for spiritual rites.



凡例

確認された遺構

- 塚
- ★ 祭祀址
- ▼ やぐら
- ▲ 祠
- ◆ 合戦口あわらけ
- ◇ 石塔製作址
- 調査した堀切
- 堀切

霧峰山・天台山地区
Ihobasen・Tendaisan-Area

柳井奈切通地区
Asamakiriyoshi-Area

鹿ヶ谷・巨瀬呂坂地区
Kamegayu・Kobukurozaka-Area

飯群坂地区
Kowazaka-Area

杉本坂・武蔵宮口地区
Sugimotojo・Shakado-oguchi-Area

右起切通地区
Naogokiriyoshi-Area

大山院地区
Daihanjizaka-Area

根草寺坂地区
Gokurakujizaka-Area

調査地区・遺構分布図

0 500 1000m



釈迦堂口
Shakadou-guchi

古都鎌倉を取り巻く
山稜部の調査概要

発行日 平成13年11月1日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 中川印刷株式会社